俵万智歌集『未来のサイズ』

（角川書店）

第六歌集であり三部構成。コロナ禍の二〇二〇年の歌、遡って石垣島、現在も住む宮崎での歌と続く。内容も幅広い。

感染者二桁に減り良いほうのニュースにカウントされる人たち

状況は異なっても日々の数字に省略される一人ひとりの存在が常にあることを読者に気づかせる。

あと三日で引っ越しをする我が部屋に日常として子ども七人

日に四度電話をかけてくる日あり息子の声を嗅ぐように聴く

最後とは知らぬ最後がすぎてゆくその連続と思う子育て

石垣島での濃密な子育ての時間、その後入寮した子の成長と自立を実感してゆく作者の心情がうかがわれる。

テンポよく刻むリズムの危うさのナシ　ヨナリズムやコマーシャリズム

「子育てを通して、社会のありようへの関心を深めた時期でもあった」とあとがきにあり、自身の日常と社会全体の両面が丁寧に掬いとられている。（冨永恵美子）

大森静佳著『この世の息　歌人・河野裕子論』

（角川書店）

河野裕子が残した十五冊の歌集。その全体を見渡しつつ現代短歌史における位置づけも試みる意欲的な論考集である。作品の言葉や文体的特徴を詳細に捉える。また、初出を踏まえ一首の背景を探るなど歌を精緻に読む。と同時に、先行評論を丹念に調べ、近現代歌人との比較も行う。

評価の分かれる中期の作品を、「没入感覚」―ものに「入る」「入りこまれる」―という視点から読み解いていくのも興味深い。例えば次の一首、

わたくしはもう灰なのよひとつまみの灰がありたり石段の隅　『歩く』

も「没入感覚」の歌で、その感覚は自然や外界が話しかけてくるような後期の歌にもつながる、河野独特の系譜だとする。また、この歌が病気の発見以前の歌であることを指摘しつつ、時間を先取りした歌、あるいは口語体や対話等を用いた河野らしい「声の聞こえる」歌にも注目する。

著者は、繰り返し表れるテーマと振幅の激しい作風の変化を追い、螺旋階段を上がるように河野の歌業を辿る。（田中　泉）

大口玲子歌集『自由』

（書肆侃侃房）

第七歌集。著者は神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーの詩句「ただ行為の中にのみ自由はある」を胸に置き、原発、死刑、安保法制などの問題に関わる。

丁寧に書かれてあればわれもまたしづかに寒く陳述すべし

にんげんがメモをとりつつ聞くべきは椿の陳述　椿の夜に

九州電力と国を相手にした裁判では、原告の一人として陳述する。個人史がそのまま社会史という体験を大胆に把握し、繊細な感覚で綴る。同時に、不登校の息子と向き合う母としての思いもうたわれる。

子の短歌（うた）に子のさびしさは歌はれて母として読めばさびしくなりぬ

学校に行かなくてもよいが勉強はすべしと思ふ　自由のために

著者の特殊な体験を歌にまで昇華するのは、その思索の深さと粘り強さであろう。

海暗くあるのみ白き灯台は光の問ひを投げつづけをり

「光の問ひ」に応じるように行為へ向かう姿勢に圧倒される。（有川知津子）